男女共同参画社会をめざす情報誌

PONO 2

ポノ・ポノ

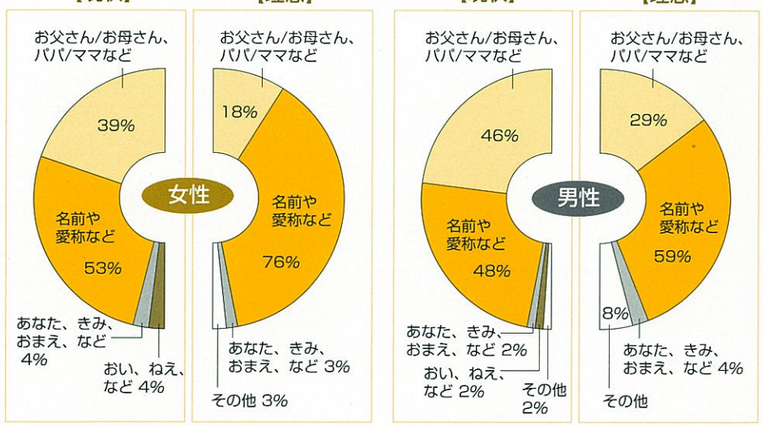
2008.11 発行　浦安市 市長公室 企画政策課 人権・男女共同参画班
〒279－8501　浦安市猫実1-1-1　TEL 047（351）1111
編集：「ポノ・ポノ」vol.12 編集会議・市民編集員

vol.12

特集　私って、だれ？ ―「呼び名」と「私」のいい関係

今回、ポノポノでは「呼び名」について考えてみました。「私ってどういう存在なんだろう？」そう考えるとき、日々の「呼び名」の中にこそ、そのヒントが隠れているのではないかと思ったからです。呼び名でその人の本質が変わるわけではないかもしれない。でも、自分の価値観や心の持ち方を変えることはできるかもしれません。

たかが呼び名、されど呼び名。さあ、もう一度「呼び名」というものを見つめなおすところから、自分探しを始めてみませんか。



市内在住の 100 名の男女にご協力をいただき、呼び名の実態と意識について、アンケート調査を行いました。
「あなたはパートナーからどう呼ばれていますか？（現状）」とうかがったところ、男女ともに、親の代名詞で呼ばれている人と、名前や愛称で呼ばれている人が約半々。ところが、「もし今の呼び方を変えるチャンスがあるとしたら、どう呼ばれたいですか？（理想）」とうかがうと、男性で約 6 割・女性では実に 8 割近くもの人が「名前や愛称で呼ばれたい」と答えているのです。
みなさんは、この数字をどうとらえますか。

呼び方、呼ばれ方
―私たちの場合

みなさんは、どう呼びあっているのでしょう。さまざまな年齢、立場の方にお話をうかがいました。

お互いに「チャギアー（愛しい人）」と呼びます

姜 美鎭（カン ミジン）さん（30 代）高州在住

結婚を機に日本に移り住んで 12 年になる姜美鎭さん。2 人の小学生のお母さんで、現在は韓国式易学士としてもご活躍中です。夫婦での呼び方についてたずねると「夫がわたしを呼ぶ時も“チャギアー”、わたしが夫を呼ぶ時も“チャギアー”ですね」。“チャギアー”とは韓国語で「愛しい人」。「『あなた』という意味に『愛しているよ』というニュアンスが入っています」。

そう話す美鎭さんは日本に来て間もないころ、自分の夫を「主人」や「パパ」という日本語の呼び方を耳にして「はじめはびっくりしました」。不思議に思い、「主人」という言葉の意味を辞書で調べると、使うことに少し抵抗を感じたといいます。「韓国人は夫や家族をとても大切にします。でも、夫のことを『主人』とは呼びませんね」。最近では、友人との会話の中で耳にする機会が多いので、自分もつい夫のことを「うちのパパが」と言ってしまうときがあるといいます。「ある日、韓国の友人に、美鎭の父親ではないのに『パパ』って言うのはおかしいねと言われました。たしかに違和感がありますが、今では『うちの主人が』『うちのダンナが』『うちのパパが』と、ごちゃ混ぜで使っていますよ」と困ったように微笑みます。

夫婦の間でも、「呼び方、言葉の使い方はとても大事」と語る美鎭さん。「呼びかけひとつで気分も違ってきますからね。“チャギアー”は互いへの愛情を感じることができる呼び方です。だから、私たち夫婦は年老いてもずっと変わらず“チャギアー”と呼び合いたいですね」と素敵な笑顔で話してくれました。

お互いを尊重する証として

松本文郎さん（74 歳）・千代子さん（73 歳）弁天在住

中学・高校・大学を共に過ごし、ニックネームで呼び合う期間が長かった松本文郎さん・千代子さん夫妻。結婚を経て、互いに「パパ・ママ」と呼ぶようになり、やがて子育てがひと段落つきます。それぞれが主役として自分の人生をもう一度しっかり見つめ直すときを迎え、千代子さんは 50 歳で資格を取り日本語教師となりました。並行するように、再び自然と「役割」ではなく「名前やニックネーム」で呼び合うようになったふたり。「昔の新鮮な気持ちに戻れたわね」と言う千代子さんに、文郎さんもにっこり笑います。

一方、退職するまでは多忙だった文郎さんが現在では家事を幅広く担います。千代子さんがイキイキと仕事をしている姿が嬉しく、「やれる方がやるのが当たり前」とのこと。そして、その姿勢は呼び名に対する考え方にも反映されているようです。

対等に役割を担い、対等に尊重し合うからこそ「『おい・ねえ』などの呼びかけや『おまえ・あなた』などの代名詞ではなく、その人固有の名前で呼ぶことが大切」と文郎さん。結婚後も人間同士として対等な立場を認め合っていくために、「『名前』という呼び名から入ればお互いの意識が変わってくるのではないかしら」と千代子さんも言葉を添えます。もともと、気持ちや考えを言葉にして伝えることを大切にしているという松本夫妻にとって、「呼び名」はコミュニケーションの基本となるものです。

「名前を呼び合わなくても意識の中で対等に向き合っている夫婦はいるでしょう。でも、わたし達は名前を呼ぶことでその意識がさらに強まることを感じています」。ふたりの原点は「お互いを尊重する想い」にあるようです。

グラウンドでも「お父さん」呼び名は自然体のままで

髙野真介さん（41歳）今川在住

見明川小で毎週土曜日に活動している子ども達のサッカーサークルの代表を務め「コーチ」と呼ばれている髙野真介さん。「7 年前、サークルが立ち上がったときに小学校 1 年生だった長男が在籍しており、子ども達の世話役を募った声にこたえる形で参加してから今までずっと、活動を続けています」。

「コーチ」と呼ばれるようになり、「子ども達を預かる社会的責任に加え、市大会や県レベルの活動から派生する横のつながりが増えました」。学校や保護者など地域と関わりをもつ機会が多く、「公園デビュー」ならぬ「地域デビュー」を果たした髙野さん。「コーチ」と慕われる立場上、「スーパーの試食コーナーでつまみ食いができなくなりました」と笑わせてくれた後、「リタイア後の地元生活が今から楽しみ」とも。

そんな「コーチ」としての顔をのぞかせる髙野さんも、現在クラブに在籍中の次男からは、グラウンドで「コーチ」とは呼ばれていないそうです。「息子は普通に『お父さん』と呼んでますね」。髙野さん自身、孫が生まれて「おじいちゃん」となった自分の父親を呼ぶときも、「『お父さん』のままです。僕にとってはずっと父親ですから。子どもにあわせて『おじいちゃん』とは呼ばないです。妻のことも『お母さん』とは呼ばないですね」。

職場と家庭に加え、地域での役割があり、地元に根ざした生活を送っている髙野さん。しかし、役割にあわせた呼び名ではなく、自分なりの価値観で呼び名を選んでいるようです。

呼び名今昔

私たちが何気なく使っている呼称。さかのぼれば、意外な語源や歴史をもっていることをご存じですか。代表的なものを挙げてみましょう。

【主人】 そもそもは一家の長や店主を指して、あくまで上流家庭で使われていた主従関係を示す言葉でした。「夫」を「主人」と呼ぶ風潮が広まったのは、戦後の経済成長期以降のこと。中流意識の広まりと、核家族化を背景に、家長たる夫を「主人」と上流風に呼ぶ人が増えたとする説があります。

【旦那】 語源はサンスクリット語（梵語）の「ダーナ」で、お布施をする人のこと。転じて、お金を出す人＝パトロンの意味で使われるようになり、そこから派生して奉公人が店主を、商人が客を、妻が夫を呼ぶときの敬称として用いられるようになったと言われています。

【奥様】 文字通り「奥に住まう人」のこと。もとは公家や大名など身分の高い人の妻の敬称で、のちに武家や豪商などの妻にも用いられるようになりました。「家内」などと同様に「表に出てこない人」の意を含んでいるとする見方もあります。

【嫁】 語源は諸説あり。旧家長制度では、息子の妻、あるいは娘の夫として家に迎える者は、全て家長の籍に入ることになり、それを親の立場から「嫁」「婿」と呼んでいました。現在の民法では「婚姻＝相手の親との養子縁組」ではないので、一般的な既婚女性たちは、実は法的にはみんな「嫁」ではないわけです。

これだけ見ても、多くの呼称が、封建的家制度の時代の遺物であることがわかります。それに抵抗を感じて、上下のない「妻」「夫」という呼称を使ったり、最近では「パートナー」「つれあい」「相方」などを用いる人も増えているようです。

【参考】「主人ということば」 福田真弓（明石書店）/「女性の呼び方大研究」 遠藤織枝（三省堂）/「語源由来辞典」web サイト

いま浦安の

すてきな人

マリク君代さん

国連大学女性協会副会長を務め、地域活動にも積極的に関わる浦安在住28年目のマリク君代さん。活動のことや今までのお仕事の話をうかがいました。

私流ワーク・ライフ・バランス

君代さんは、インド人の夫が国連大学に勤めていた関係で、国連大学女性協会の立ち上げ時から関わっています。同協会は、国連大学の趣旨に賛同する女性の会です。国連大学で研究する女性学者に助成金を授与していましたが、今は主に、講演会を主催し会員の啓発をしています。その内容は、女性問題に加え、環境、食糧、地球温暖化、紛争問題と幅広いそうです。「日本女性」の研究をしているアメリカ女性の講演では「いかに日本の女性が大変か、育児と家庭をどのように器用に切り盛りしているか」の現状が報告され、日本の働く女性の事情が外国学者の研究の対象となりえることが印象深かったそうです。

「そういえば、長女ミーナ出産のとき、いざ、保育園を探してみると、その当時は数えるくらいしかなく、空きもなく、あえなく出産前から続けていたグラフィックデザイナーの仕事をあきらめました」。これを機に、武蔵野美術大学の通信課程で3年間学び、再就職。おりしもグラフィックデザイナーの仕事が手作業からパソコンへと変化するなか、不景気のあおりで仕事が激減、別の道を選択。「何ができることはないかと思い、テンプル大学で英語教授法を学び、50歳で講師として働き始めたとき、両親が倒れまして…女の人生ですね」と感慨深げに話します。その後、両親が相次いで亡くなったとき「人生って長くない」と感じ、仕事を辞めて、もっと好きなことをしようと思い、長年じっくり取り組めなかった絵を描くことを始めたそうです。

これからも国連大学女性協会の活動をずっと続けながら、浦安市の在住外国人会や国際交流協会の手伝いをしていくつもりだそうです。「活動を通して地域の人や子ども達をまきこんでいきたいですね」。協会と地域のボランティア活動、そして絵を描くことが、今の生活の中心になっているようです。

個展を開くなどの目標がありますかとたずねると、「自分のために描きます。人にあげて喜ばれるのも嬉しいです」と君代さん。人生のさまざまな転機に、自分流ライフスタイルを模索してきた強さと、しなやかさを感じました。

編集に携わって

この冊子は「ポノ・ポノ」vol.12編集会議の市民編集員がつくりました。

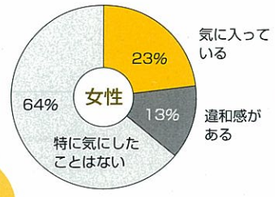
奈良ヒミコ：自分にもっと欲しいもの、企画力行動力判断力。とはいえ楽しく参加させていただきました。感謝です。
山口晶子：たかが呼び方…と思いましたが、そこには相手との関係が見え隠れしているようです。されど呼び方…意外に奥が深い！
村林さえ：インタビューした30分間の密度の濃さにびっくり！「人」とのめぐり会いによる気づきを大切にしたいと実感しました。
内山京子：編集という未知の世界に初挑戦。一文字一文字の重要性が、いかに大切かを身にしみて感じました。
伯野朋絵：夫婦でも、親子でも、友人でも…わたしはわたし。あなたはあなた。でも、つながっている。それが心地よい関係。
福井泉：ひとつのテーマにも、思いや考えは人それぞれ。それを伝える困難さに戸惑い、協力してくれる仲間の存在の大切さを実感しました。
川村求可：書くことは呼吸すること。幸せなこと。あ～楽しかった。温かいフレーバードティー飲んでほっこりして、ひとまず終了。

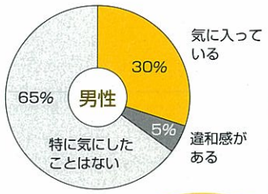
「ポノ・ポノ」の意味　ハワイ語の「PONO」（意味は、正しさ、幸福、繁栄など）に由来します。2つ並べて「ポノ・ポノ」と声に出してみたときの響きが親しみやすいでしょう!?

浦安市の男女100人アンケートより

呼び方、呼ばれ方の本音

Q 今の呼ばれ方は気に入っていますか？またその理由は？





子どもがいればママと呼ばれるのは当然では？（30代女性）

子どもが成人した今も「ママ」は、ちょっと変かしら…。（50代女性）

「ママ」や「ねえ」と呼びかけられると、親近感を感じます。（40代女性）

「ママ」や「お母さん」よりも、名前で呼ばれるほうが嬉しいです。（20代女性）

子どもがいるからといってパパ・ママでは呼び合いたくない。（30代男性）

親の代名詞で呼び合うことをあまり気にしたことはないが、常に子どもがいるという前提で会話をしているのかな？（60代男性）

Q 他人に対してパートナーのことをどう呼びますか？

男性は場所を問わず「家内」「妻」「奥さん」「女房」「カミさん」「うちのやつ」「うちの母さん」「嫁」「嫁さん」などと実に多様。それに対して、女性は大部分の方が、ほとんどの場面で「主人」、もしくは親しい相手には「パパ」「旦那」でそれ以外は「主人」「夫」などと使い分ける…ということで一致していました。これはとても興味深い現象。どうやら、妻が夫を呼ぶ場合のほうが、暗黙の制約のようなものがより根強く残っていると言えそうです。

なかには「夫はある意味自分より上」と感じている方もいれば「対外的に『主人が』と使っているけど、夫は私の『主』ではなく対等な『パートナー』と思っているので、心の中ではいつも違和感は感じている。それにふさわしい中立的な日本語での呼び方があればいいのに…」という声も聞かれました。

Q 改めて呼び方、呼ばれ方などの呼び名について、どう考えますか？

結婚・出産で呼び名を変えるのは、自分自身がその役割だけになってしまう気がする。（30代女性）

本人のいないところで「ヨメ」と呼ぶのは論外！（30代女性）

心が通い合っていれば、呼び名どうこうは小さな問題だと思います。（40代女性）

関係性の変化がそのまま呼称の変化となる日本語は豊かで良いと思う。（50代男性）

子ども達も成長してきたので、固有名詞で呼ぶことを意識していきたいと思います。（40代女性）

呼び方ひとつにも、関係性が表れるものだと思う。（60代女性）

呼び捨てや「おい」などとは言いたくない。相手を尊重すべき。（50代男性）

前は「ねえ」とか「おい」とかで呼んでいたけれど、最近名前で呼ぶようになってからは会話が増えました。（30代男性）

アンケートを終えて

「今の呼ばれ方は気に入っていますか？」「呼び名について改めてどう考えますか？」の問いかけに対して、男性は「なんとなく成り行き」「特に気にしない」といった回答が多かったのに対し、女性は実に2/3近くの方が、何らかの具体的な意見を持っていたのが印象的でした。
「呼び名」はときに足かせにもなれば、ときに自分を解き放つ翼にもなり得るもの。これをきっかけに、改めて「呼び名」について考え直してみませんか。

うらやすNOW

浦安市では、今年7月に小・中学生向けに新しい取り組みとして「こども広報うらやす」（年2回発行）を創刊しました。今回は広報担当の方にその取り組みについてうかがいました。

創刊のきっかけは、新規事業や業務改善などの提案を行うアンテナ職員から、子ども向けに市の広報紙を作ってはどうかという提案がありました。広報担当で検討した結果、せっかくなら子ども達自身が記者になり、自分達が決めたテーマで取材、編集をして作ってはどうかということになりました。

子ども達の視点に立って感じたこと、疑問に思ったこと、発見したことを同世代の子ども達に伝えてもらい、浦安をもっと好きになってほしいというのが、一番のねらいです。そして、ここ浦安が自分達のふるさとなんだという意識を持ってもらえればと思います。

◆

創刊号では、市内の小・中学生7人が子ども記者になりました。テーマを決めるときは、はじめての試みなので、どれくらい意見が出るのか不安もありました。でも実際に子ども達からは、今年で創立120年目を迎えた浦安小学校のこと、浦安三社祭のこと、また、街中に咲くきれいな花のことを取材したいなど、意見もどんどん出てきて、逆に驚かされました。

浦安には地域ごとにいろいろな街の顔があります。今後も、子ども達の視点でとらえた浦安を発信できればと思っています。